

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 9 月 15 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00048

研究課題名(和文) フッサールの時間意識の現象学を基礎とする、意識の一般構造の研究

研究課題名(英文) Research on general structure of consciousness based on Husserl's phenomenology of time-consciousness

研究代表者

村田 憲郎 (Murata, Norio)

東海大学・文学部・教授

研究者番号：80514976

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：フッサールの時間意識の現象学は近年、一方で文献学的調査も進んだが、他方では心の哲学や認知科学の方面からも再評価されつつある。こうした動向を踏まえ、彼の時間論を、まず第一に初期フッサールの哲学形成の背景をなしている布伦ターノ学派との関係においてとらえ直し、また第二に近年の時間的経験の哲学と関連づける研究を行った。成果として、時間知覚や自己意識の問題について、フッサールの理論が独自の論点を形成していることがわかった。本研究の成果は、第一義的には彼の時間論の発展史的理解を一新するものであるが、それにとどまらず、近年の脳科学や認知科学をも交えた人文科学の総合的研究にも寄与しているものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フッサールの時間意識の議論は、日本を含めた大戦後の知的風景において、新たな主体のあり方の探求のための土台を提供してきた。そこではポストハイデガーの現象学に見られたように、合理性の彼岸を指し示すような現象学の限界として位置づけられた。しかしそもそもフッサールの時間論は、理性と学の基礎づけをめざす彼の哲学全体とともに発展したものであり、一方で伝統的に哲学が解明してきた習慣性や徳をそなえた主体ともよく折り合うが、他方で近年の人工知能や脳科学の新たな知見とも対話を可能にし、伝統的人文知と新たな科学的知見とが融合した総合的な人間科学の可能性を開くものであり、本研究はそうした性格の一端を示した。

研究成果の概要(英文)：Recently Husserl's phenomenology of time consciousness has made a certain progress in text research, and also become more reevaluated by philosophy of mind and cognitive science. In the light of these trends I have studied Husserl's theory of time, namely on the one hand in relation to the Brentano school that formed the background of the early Husserl's philosophy, and on the other hand, in relation to the recent philosophy of temporal experience. As a result, I have found that Husserl's theory of time-perception and self-consciousness can give us an original argument. The results of this study will, primarily, renew the bibliographical findings, but they will also contribute to the innovation of the humanities, including brain science and cognitive science in recent years.

研究分野：哲学

キーワード：現象学 時間意識 時間 意識 フッサール ブレンターノ 時間的経験の哲学

1. 研究開始当初の背景

2000年代から認知科学や心の哲学からの影響もあり、フッサールの時間意識の議論について再び注目が集まってきた。この議論はその母体であるブレンターノ学派や、同時代の哲学者・心理学者の議論とともに包括的に扱われ、理論モデルとしての有効性が吟味されていた。

2. 研究の目的

こうした背景から、フッサールの時間論を、第一に、フッサールの師ブレンターノや、ブレンターノ学派の哲学者たち、また同時代の哲学者、心理学者たちの議論と比較して明確化すること、第二に、心の哲学や認知科学との関係で、現代さかんに議論されている「時間経験の哲学」との関連を探ることが目指された。

3. 研究の方法

まず第一にブレンターノ学派の議論を、フッサールに言及されたものを優先して文献を選択し、その立論を再構成しながら、それとの比較においてフッサールの時間論の眼目を明らかにする。第二に現代の代表的な論者がフッサールをどのように評価しているかを確認した上で、その評価の是非を検証する。

4. 研究成果

(1) 一年目の2018年度には、ブレンターノを中心とするブレンターノ学派およびその周辺の哲学者・心理学者たちから、とりわけフッサールと関連する論者の議論のいくつかに注目し、その意義を明確にする作業を行なった。まず6月に米国ピッツバーグで開催された NASEP (North American Society for Early Phenomenology) のコロキウムに参加し、ブレンターノとフッサールの時間論を比較する発表を行った。また9月に日本心理学会にて、ブレンターノと同年に主著を発表した実験心理学の始祖ヴィルヘルム・ヴントの理論を比較する発表を行い、ヴントとの対比においてブレンターノの記述的心理学的特徴を浮き彫りにした。11月には日本現象学会の研究大会にて、ブレンターノ批判を見据えつつ、フッサールが1905年の時間論においてどのような意味で現象学的還元を先取りしていたのかを提示する発表を行なった。2019年3月のフッサール研究会では、フッサールが時間講義の時期に関心を持っていた、ブレンターノ学派のマイノングと心理学者ウィリアム・シュテルンとの論争をとりあげ、その論争を踏まえると、近年の時間経験の哲学の代表的な論者であるバリー・デイントンのフッサール批判は当たらないものであることを示した。最後に同じく2019年3月、オンラインジャーナル『こころの科学とエピステモロジー』第1号にて、上記シュテルンの論文の邦訳を発表した。

総じて一年目の研究発表により、これまであまり注目されてこなかった、1905年の時間講義を中心とするフッサール初期時間論と、ブレンターノおよびその他の論者たちの時間論との相違を包括的に扱うことができ、あわせて現代の時間経験の哲学に対しても、フッサールの時間論がおおよそ位置づけられたと言える。

(2) 二年目の2019年には、前年度に発表した内容を論文化する作業に取り組みつつ、9月にはフッサールが受講したブレンターノの講義の未公開ノートを確認するため、オーストリア・グラーツ大学のブレンターノ文庫を訪問し、一次資料としての講義ノートおよび、国内では入手困難な多くの二次文献を収集した。前年度の現象学会の発表が『現象学年報』第35号に掲載され、フッサール研究会での発表はオンラインジャーナル『フッサール研究』第17号に掲載された。また、ブレンターノ学派の中でも特異な位置を占める哲学者クリスチャン・フォン・エーレンフェルスが「ゲシュタルト」の概念をはじめ提示した有名な論文「ゲシュタルト質」についての邦訳を『こころの科学とエピステモロジー』第2号に発表し、ブレンターノ学派の多様な広がりについての理解を深めた。

さらに研究面では、1905年の時間講義以降、フッサールの1900年代後半の諸講義を確認しながら、時間意識の議論を彼の哲学全体の発展の中で理解する作業を進めた。この作業は次年度も継続されるが、その中でこれまでおそらく国内で論じられたことのないブレンターノ学派の哲学者フーゴー・ベルクマンに対する当時のフッサールの言及に着目し、彼の哲学の意義を明確化する必要性を感じた。この研究は2020年3月のフッサール研究会で発表される計画だったが、コロナ禍により研究会が中止となり叶わなかった。

(3) 三年目、本来の最終年度となる2020年度には、現代の時間経験の哲学への関係を明確化すること、また前年度に収集したブレンターノの講義の内容を精査することが課題となった。第一の課題については、フッサールの時間意識の議論を現代の把持主義/延長主義という整理に照らし合わせたときどのような意味を持つのかを、とりわけ前年度からの研究課題である1900年

代後半までを含めた、初期時間論の変遷を通じて確認する作業をした。この成果は、三村尚彦氏（関西大学）の采配により、時間経験の哲学で国内の第一人者である西村正秀氏（滋賀大学）との共同で11月の日本現象学会でのワークショップという形で発表された。第二の課題については、ブレンターノと集合論など数学の議論との関連、および現代の形而上学との関連なども考慮されるべきと考え、海外からゲストを招いてのワークショップを計画していたが、これはコロナ禍により実現しなかった。なお、前年度の三月に発表予定だったベルクマン研究の成果が、9月にオンラインで開催されたフッサール研究会において発表された。

このように、本来最終年度となるべき三年目に、いくつかの計画がコロナ禍の影響を受けて中止ないし変更を余儀なくされたが、年度末での研究期間延長が認められたおかげで、次年度まで持ち越されることとなった。

(4) 延長した四年目には、2019年度に収集した資料にもとづき、ブレンターノの講義内容について多様な角度からあらためてアプローチした。奇しくも当の講義が当時の受講者のノートをもとに公刊されたため、もともと専門家を招聘してのワークショップとして計画していたものを、私個人の研究発表に切り替えて準備を進めつつ、フッサールの最初期の著作『算術の哲学』やその直後の公刊論文など、ブレンターノ学派の刻印を強く帯びた数学・論理学の研究を確認した。この成果は2022年3月のフッサール研究会にて発表された。

こうして遅れがちではあったが、最終的には当初の目的である1. ブレンターノ学派および当時の論者たちとの比較において、また2. 現代の時間経験の哲学との関連において、フッサールの時間意識の現象学の意義をあらためて明確化する、という二点がおおよそ達成できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 村田憲郎	4. 巻 2
2. 論文標題 シュテルン、フッサールと「ロツツェの想定」 ギャラガーの議論から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 こころの科学とエピステモロジー	6. 最初と最後の頁 70-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村田憲郎	4. 巻 2
2. 論文標題 クリスチャン・フォン・エーレンフェルス「ゲシュタルト」質について」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 こころの科学とエピステモロジー	6. 最初と最後の頁 30-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村田憲郎	4. 巻 18
2. 論文標題 H. ベルクマンの内的知覚論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 フッサール研究	6. 最初と最後の頁 19-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村田憲郎	4. 巻 1
2. 論文標題 How Is Time Constituted in Consciousness? Theories of Apprehension in Husserl's Phenomenology of Time	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 New Phenomenological Studies in Japan	6. 最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 村田憲郎	4. 巻 35
2. 論文標題 1905年の時間論はどのような意味で現象学的還元を先取りしているのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現象学年報	6. 最初と最後の頁 77-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田憲郎	4. 巻 17
2. 論文標題 マイノング - シュテルン論争とフッサール	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 フッサール研究	6. 最初と最後の頁 18-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田憲郎	4. 巻 110
2. 論文標題 P. ゴルディのナラティヴ論 - - The Mess Insideを読む - -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東海大学紀要 文学部	6. 最初と最後の頁 65-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田憲郎	4. 巻 2
2. 論文標題 クリスチャン・フォン・エーレンフェルス「『ゲシュタルト質』について」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 こころの科学とエピステモロジー	6. 最初と最後の頁 30-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田憲郎	4. 巻 2
2. 論文標題 シュテルン、フッサールと「ロツェ想定」 - - ギャラガーの議論から - -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 こころの科学とエピステモロジー	6. 最初と最後の頁 70-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ウィリアム・シュテルン (訳: 村田憲郎)	4. 巻 1
2. 論文標題 心的な現前時間	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 こころの科学とエピステモロジー	6. 最初と最後の頁 19-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 村田憲郎
2. 発表標題 フッサールの時間論の延長説的側面について プレンターノとフッサール
3. 学会等名 日本現象学会第42回大会公募シンポジウム「フッサール時間論の「現在」」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村田憲郎
2. 発表標題 H. ベルクマンの内的知覚論
3. 学会等名 フッサール研究会第18回研究会 (オンライン)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村田憲郎
2. 発表標題 フッサールの時間論 および体験流の即自の構成
3. 学会等名 第59回自他表象研究会（オンライン）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村田憲郎
2. 発表標題 Time-Consciousness in Brentano and Husserl
3. 学会等名 NASEP (The North American Society for Early Phenomenology) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村田憲郎
2. 発表標題 ヴントとブレンターノ 内観・実験・全体と部分
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村田憲郎
2. 発表標題 1905年の時間論はどのような意味で現象学的還元を先取りしているのか
3. 学会等名 日本現象学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村田憲郎
2. 発表標題 マイノング - シュテルン論争とフッサール
3. 学会等名 フッサール研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村田憲郎
2. 発表標題 布伦ターノ1884/5年講義「基礎論理学とそこに必要な刷新」について
3. 学会等名 フッサール研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap https://researchmap.jp/noriomuratajp Researchmap 村田憲郎 https://researchmap.jp/noriomuratajp reserchmap https://researchmap.jp/noriomuratajp/
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------